移民百年祭以前の日系カナダ人の諸活動(1967～1977)：資料紹介を中心とした一考察

和　泉　真　澄

序）これまでの日系カナダ人史

日系カナダ人の歴史研究は，戦前の移民史や第二次世界大戦期の強制移動に関しては豊富である[1]。戦後期については，1947年の日系人の国外追放反対運動や東部などへの再定住に関して少数ながら研究が見られる[2]。それ以後のコミュニティに関しては，1960年代の日系人について若干分析，もしくは記述しているものがあるが，歴史研究と言えるものはない[3]。時代は下って，1988年のリドレス解決について書かれたものはいくつか存在する[4]。そしてリドレスと関連して，1977年のカナダ移民百年祭が日系カナダ人が再びエスニック・コミュニティとしてまとまった活動を行ない始めるきっかけとなったことを指摘する研究は多い[5]。しかし，1977年の移民百年祭以前の十年間の歴史を扱った研究がほとんどなく，日系カナダ人コミュニティは，まるで1977年に突然歴史の表舞台に登場して，文化および政治活動を行ない始め，その後，一気にリドレスまで運動を展開したような印象を受ける。

しかし筆者は，1997年および1998年にバンクーバーを主な調査地域とし，ブリティッシュ・コロンビア大学＜University of British Columbia：以下UBCと略記＞図書館，バンクーバー市立図書館，バンクーバー市公文書館，ブリティッシュ・コロンビア州＜以下BCと略記＞公文書館，グレーター・バンクーバー日系市民協会＜Greater Vancouver Japanese Canadian Citizens Association：以下バンクーバーJCCAと略記＞などに所蔵してある資料の他，日系コミュニティで活動している人々へのインタビューやコミュニティ行事への参加を通じ，1977年以前のバンクーバーにおいて，その後の日系カナダ人コミュニティの政治・文化活動を準備するさまざまな活動が行なわれていたことを発見した。

日系カナダ人の研究においては，これまで日加関係のなかで受身的に翻弄される移民像，エスニック・グループ像や，社会的上昇を成し遂げ，主流社会に同化して非政治化した日系三世像が提唱されてきたが[6]，本論文で扱う資料の中に登場する日系カナダ人たちは非常に政治的であり，彼らの活動はアジア系アメリカ人運動や公民権運動の影響がカナダにも及んでいたことを示唆している。1977年以降の活発なコミュニティ活動，そして日系人のみならず他のマイノリティや主流社会を巻き込んで展開されたリドレス運動において見られるような日系人のバイタリティは，すでに1970年代のコミュニティのなかで蓄積されていたと考えられる。この時代の日系コミュニティの歴史はまだ掘り起こされ始めたばかりで，本論文も地域的にも資料的にも包括的なものとは決して言えないが，以下のような資料の存在を紹介する形で，今後の研究へと続いていくような考察材料を提供できればと思っている。

1）UBCにおけるアジア系カナダ人学生運動：ワカヤマ・グループ

まずは，カナダ多文化主義時代の新しいエスニック・アイデンティティの担い手となった三世の活動から見ていきたい。1960年代末から1970年代の初頭にかけてバンクーバーのアジア系カナダ人三世たちの学生運動の一翼を担ったのは「ワカヤマ・グループ」という組織であった。日本，カナダを問わず，日系カナダ人の研究において「ワカヤマ・グループ」に言及したものは現在の段階では筆者の知る限り存在しない。「ワカヤマ・グループ」のまとまった記録はないが，その結成の経緯や活動をリック・シオミ＜Rick Shiomi＞が1981年に開かれた第5回アジア系カナダ人シンポジウム＜Asian Canadian

Symposium>のなかで紹介している[7]。ちなみにシオミ自身が日系コミュニティの活動に加わるようになったのは「ワカヤマ・グループ」が解散して後のことであり，彼自身はしたがってグループそのものには参加していない。筆者はシオミの書いたものの他，「ワカヤマ・グループ」の一員であったマユミ・タカサキとのインタビュー記録を保持している[8]。「ワカヤマ・グループ」に関する記述は，ほかにAsian Canadian Writers Workshopの機関紙*Rice Paper*の創刊号に，ジム・ワン・チュー<Jim Wong Chu>の書いた記事があるはずだが，現在のところまだ手に入っていない。そこで，ここでは現在手元にある資料を使い，「ワカヤマ・グループ」の活動の一端を紹介したい。

「ワカヤマ・グループ」は，1960年代末から1970年代初頭にかけてブリティッシュ・コロンビア大学に通っていた三世たちによって結成された。彼らは白人社会のなかで疎外感を味わい，アイデンティティの模索の具体的方法を探っていた若者たちだが，それについて行動を起こした点はUBCの典型的日系三世とは言えない。数名の小さなグループであるが，何人かがスティブストン<Steveston>出身であり，日系カナダ人のシンボリック・ルーツを示す名前として「ワカヤマ（和歌山）」をグループ名につけたようである[9]。彼らは同じようにグループを結成していた中国系の三世たちと集まり，アジア系カナダ人同盟<Asian Canadian Coalition>を作った。彼らが集まったのは，当時UBCで教鞭をとっていた日系アメリカ人の英語学の教授，ロナルド・タナカ<Ronald Tanaka>の門下生であったことがきっかけであった。タナカはアジア系アメリカ人運動に関係しており，その思考をカナダに持ち込んだのである。シオミの発表には，「ワカヤマ・グループ」の9項目の基本的信条が挙げられている。

a）日系カナダ人を政治的，経済的，社会的，文化的に蹂躙した白人カナダ社会に対し怒りを表明する。（第二次世界大戦前の差別，戦中の立ち退きと収容，戦後の分散は全面的なレイプの一形態であると考えられた。）
b）それなくしては我々がアイデンティティを持ち得ない，自分自身の歴史を学びかつ教える。
c）日系カナダ人としてのユニークな経験から，芸術（詩，音楽，写真など）を通じて表現できる自分の声を持つ。
d）この国にやってきて大いなる困難を耐え忍んだパイオニアである一世のおかげで我々はここにある。
e）アジア系カナダ人の処遇は西洋である北アメリカの帝国主義と資本主義の産物である。
f）マスメディアと教育制度によって刻み付けられた自分自身に対するステレオタイプを崩す。
g）芸術家はコミュニティの一部であり，コミュニティを離れての表現は無価値である。
h）この哲学を信じるものは，その信条に人生を捧げなければならない。
i）各人は個人として強い自己を作らなければならない[10]。

<原文は英語。筆者による日本語訳。以下同>

このような信条に基づき，「ワカヤマ・グループ」は日系カナダ人としての心情を表現する詩，音楽，写真などの創作を開始した。彼らはやがてグループとして，パウエル街にあった日本語学校で詩や音楽を伴う写真展を開いた[11]。

「ワカヤマ・グループ」は，当時のアメリカで起こっていたラディカルな学生運動や民族運動の影響を色濃く受けている。それは，上述の信条にも現れており，またブラック・パンサー党やブラック・パワーの影響を受けたという証言もある[12]。グループは当時の学生運動の傾向を反映して左翼的な目標を共有しており，多くの学生組織と同じように，集団特有の弊害（シオミはgroup dynamicsと表現している）やタナカの急進的なリーダーシップについて行けない者の出現などにより，ほどなく組織としての求心力が弱まっていった。また主要メンバーの卒業やタナカのアメリカへの帰国などにより，1974年までにはグループとしては解消してしまう。しかし，アジア系アメリカ人運動をカナダで実践しようとした点，日系三世の終生続く交友関係を作り出した点，また中国系と日系の学生にアジア系としての共通の活動基盤を残した点など，「ワカヤマ・グループ」の存在はその後のバンクーバーのアジア系コミュニティ活動の一つの中核を作り出したという意味で，記録しておく価値はあろう。

さて，「ワカヤマ・グループ」の火付け役ロナルド・タナカであるが，彼に関する記録は少ない。タナカは1944年，アリゾナ州ポストン収容所で生まれ，カリフォルニア大学バークレー校で英語学の博

士号をとったが，ベトナム反戦のためカナダに移り，1967年より71年までUBCで英語学を教えていた。タナカは英語学者として論文をいくつか残しており，また自らも短篇小説や詩集を出している[13]。彼の論文の多くは文学のシステム理論を使い，マイノリティ文学の可能性を分析したものである[14]。彼はUBCを去った後はカリフォルニアに帰り，カリフォルニア州立大学サクラメント校の英語学部で教職に就いた。彼はアメリカに帰ってからも多くの論文を刊行しているが，ここでは，彼がカナダにいた間に書いた新聞記事を取り上げたいと思う[15]。この新聞は，UBCのスペシャル・コレクションのなかで筆者が見つけたものであり，「パウエル・ストリート・レヴュー<Powell Street Review>」と題され1971年にトロントで発行されている。UBCには創刊号のみが保管されており，その後いつまで刊行が続いたのかは定かではないが，1977年の時点では既に財政難のため廃刊になっていることがわかっている。

この「パウエル・ストリート・レヴュー」自体が，当時の三世の考えていたことを推し量る上で非常に興味深い文献である。トロントの三世を中心とした新聞であるが，日系の歴史を重視したことからパウエル街の名前を新聞につけた。編集はアラン・ホッタ<Alan Hotta>とレイミ・チバ<Reimi Chiba>による。社説には日系カナダ人三世のマイノリティとしての自覚，そして自らのアイデンティティを探ろうという姿勢が書かれている。そしてそのための若者同士の団結が訴えられている[16]。3ページ目には詩が集められ，その中にテリー・ワタダ<Terry Watada>の「パウエル・ストリート」と題する1971年に書かれた詩も掲載されている。4ページから6ページがタナカの論説「三世アーティストとコミュニティ文化<“The Sansei Artist and Community Culture”>」である。7ページは匿名記事で，アジア系の女性である筆者がなぜ白人男性と結婚したいのかを綴った文章がある[17]。男性の理想像は白人の持つ特性のみを含み，東洋系男性はすべてそのアンチテーゼであると決め付けているところはあまり感心しないが，三世の男性はアジア的な部分を否定したがり，白人の男性と付き合ったほうがかえってはるかに女性がアジア的な部分を魅力として持ち，文化的な絆を保持できると言っているところは興味深い。編集長のアラン・ホッタは，エスニック・マイノリティの劣等感は心理学者の言うような個人の問題でなく，社会的問題であるという趣旨の論説を書いている[18]。そして，興味深いのは来たる行事の広告として，バンクーバーでUBCの学生が三月に二週間にわたりアジア系カナダ人のアイデンティティを再発見するための写真展を開き，それにゲストスピーカーとして中国系アメリカ人作家として著名なフランク・チンと日系アメリカ人詩人のローソン・イナダが来ると書かれている。この広告はロン・タナカが連絡先となっているので，恐らくシオミの書いている「ワカヤマ・グループ」による写真展のことであろう。アジア系アメリカ文学者がバンクーバーにやってきているということは，アジア系カナダ人運動がアジア系アメリカ人との交流の中で行なわれていたことを示す一つの証拠となるであろう。

さて，ロナルド・タナカの記事は，アジア系カナダ人の芸術家がなぜ育ちにくいかをカナダの人種関係の中で分析している。彼は日系カナダ人文学に関して四つの立場を述べている。第一の立場は，日系人は日本文学を誇りとすることで民族的劣等感を補うべきという立場である。第二の立場は，日系人は文化的に白人と同じなので特に見るべきものは無いという立場である。第三の立場は，普遍主義／個人主義的立場で，芸術は人種や民族に左右されるべきでないという立場である。第四の立場は，文学とはコミュニティの生活や体験に根ざしたものであり，日系カナダ人文学は必要という考え方である。もちろんタナカはこの第四の立場を支持している。そして三世が一世・二世との絆を尊重し，コミュニティに身を捧げ，声を出す勇気を持つと同時に，仲間意識を築き団結する必要性を説いている。タナカが「ワカヤマ・グループ」を通じ，日系三世に残したものは，この記事に集約されていると言える。なぜなら彼は，コミュニティへの献身，歴史の見なおし，一世との絆の回復，独自の芸術表現，そして社会正義の追求など，その後の三世の行動に見られるすべての面をこの記事の中で説いているからである。タナカの存在は，日系カナダ人の歴史のなかで，少な

くとも日本の研究者にはまったく知られていないが，アジア系カナダ人運動のパイオニア的三世を育てたという意味で，アジア系カナダ人運動の祖<Founding Fathers／Mothers>のうちの一人であると言っても過言ではないであろう。

2）三世の日本体験

もう少しバンクーバーの話を続けよう。シオミによると，1974年には「ワカヤマ・グループ」は解消したとあるが，グループの中の何人かはそのころ集団で日本に行っている。マユミ・タカサキ，ナオミ・シカゼ，コニー・カドタらがそうである。また，「ワカヤマ・グループ」以外にも，この頃若手の日系カナダ人がルーツを求めて日本に渡った。リック・シオミは後に「パウエル・ストリート・レヴュー<Powell Sreet Revue：上述の新聞名と綴りが違う別の組織である。以下のレヴューはこちらの組織を指す。>」の仲間とともに自らの日本体験を語り合っている[19]。また，若手の二世で後に三世たちとともにパウエル街で活躍する写真家タミオ・ワカヤマも，このころ日本に渡っている。彼は自らの半生を『帰郷』の前書きに書いており，その中に日本での体験も見ることができる。また，筆者がバンクーバーで行なったマユミ・タカサキおよびタミオ・ワカヤマのインタビューのなかにも，それぞれの日本体験に触れた部分がある。

話が少し先に飛ぶが，バンクーバーの「パウエル・ストリート・レヴュー」について説明しておこう。「ワカヤマ・グループ」が解散した後，日本に行ったメンバーたちのほとんどは，1970年代後半にさしかかる頃にカナダに帰国し，その頃形成されつつあった「隣組」や「ランゲージ・エイド」などのコミュニティ活動に参加するようになった。そのなかから元「ワカヤマ・グループ」のメンバーたちにシオミらを加えた三世の組織が1977年1月に発足した。これが「パウエル・ストリート・レヴュー」である[20]。「パウエル・ストリート・レヴュー」のメンバーは，第1回「パウエル祭」を始めとして，1977年以降のバンクーバーの三世の文化・芸術活動に中心的な役割を果たすようになる。

では，話を元に戻して，「パウエル・ストリート・レヴュー」が後に語った三世の日本体験を見ていこう。リック・シオミが日本に行ったいきさつは面白い。彼は1972年，バンクーバーのサイモン・フレーザー大学で教育学を勉強していたが，日本にはまったく行きたいと思わなかったという。ちなみに彼は1947年にトロントで生まれており，交友関係はほとんど白人という典型的な三世として育っている。バンクーバーにいても，日系人とは付き合いがなかった。卒業後ヨーロッパを旅行した彼は，そこで冒険的なドイツ人の若者と出会い，彼自身も冒険に憧れ，それではという形でアジアへやってきた。73年と74年に香港で英語を教えていたが，その両年の夏の間日本に滞在する[21]。そしてカナダに戻った1975年より，それまでの白人中心の交友関係を離れ，バンクーバーの日系カナダ人コミュニティで活動するようになる。そのときの心境の変化を彼は「バンクーバーで日系コミュニティに関係するようになって，それまで理解しようとしていた自分のアイデンティティを見つけた。自分のテリトリーを見つけたんだ。」と語っている[22]。

「パウエル・ストリート・レヴュー」の他のメンバーたちも日本から帰国した後，次々と日系コミュニティ活動に加わっていった。マユミ・タカサキは従姉妹のナオミ・シカゼとともに京都に住んで，英語を教えながら，料理，生け花など日本では花嫁修業と考えられていた教室に熱心に通った。彼女の生い立ちや日本体験の位置付けは，シオミのそれと対照的である。タカサキは1952年バンクーバーで生まれ，タシメとスティブストンで育った。UBCで日本学を専攻し，「ワカヤマ・グループ」で活躍，日本も13歳および19歳の時に訪れている。つまり，彼女にとって日本はそれほど異国ではなかったのである。ところが，74年から77年の二年半の滞在のなかで，彼女は自分が日本には決して溶け込めないことを悟る[23]。姿形は同じでも自分は決して日本人にはなれないことを知り，彼女は帰国し，その後すぐに日系コミュニティ活動に加わるのである。

もう一人の元「ワカヤマ・グループ」組のコニー・カドタは，白人男性と結婚した日系人として日本に滞在した。座談会のなかで，彼女は日本にいた間，

白人男性と日本人女性のカップルを見て，つい「彼はあの女性を利用しているんだ」とか「彼女と付き合っているのは単に身体的魅力のためだけなんだ」などと，人種と男女関係のステレオタイプを他人に当てはめて考えてしまっていた自分への戸惑いを表現している[24]。日本にいる時間が経つうち，夫と一緒に外出することが少なくなったともいう。異なる人種・文化・ジェンダーの錯綜する微妙な空間にいる日系人女性の発言として興味深いものがある。コニー・カドタは日本から帰ると，自分の姿が周囲の多数と異なることに違和感を覚え，アジア系の人々と交際することを望んだ。そして，友人であった日本人マヤ・コイズミを「ランゲージ・エイド」に訪ね，そこから彼女の日系コミュニティ活動が始まるのである。

自分の容姿が社会の大多数と異なることへの違和感は，日系人が多かれ少なかれ共通に表現する問題である。座談会の中でも，日本に行ったとき自分が外見的に周囲からまったく目立たなくなったことへの安心感に全員が共感している。そのなかでハワード・イノウエは「(日本にいると）目立ったとしてもそれは黒い髪をしている以外の理由なんだ。その点が恐らく重要だと思う。」と発言している[25]。人種は社会的構築であるといわれているが，それでも人種関係の上で身体的特徴の果たす役割が非常に大きいことを示唆する発言として注目に値するであろう。

身体的イメージと権力関係の相対性については，タミオ・ワカヤマの体験が示唆的である。ワカヤマは1941年に生まれ，強制移動でヘースティングス・パーク仮収容所からタシメ収容所，そしてオンタリオ州のチェイサム<Chatham>の黒人「ゲットー」へと両親とともに移住する。彼は日系人であるがゆえのいじめやけんか，そして映画のなかに出てくる敵にいつも自分の姿が似ていたための劣等感などの思い出を語る[26]。しかし，彼が無意識のうちに信じていた，白人を頂上とした固定化した人種イメージの階層性は，日本での体験により打ち砕かれた。ワカヤマは1963年よりアラバマ州で「スニック<Snick: Student Nonviolent Coordinating Committee>」のメンバーとなり公民権運動に加わっている[27]。その間に写真の技術を身につけたワカヤマは，二年後カナダに戻り，カナダでの社会運動に参加する。しかし間もなくその運動は頓挫し，やがてワカヤマは日本へ向かうのである。日本でワカヤマが出会ったのは，映画のなかの三船敏郎ら日本人ヒーローたちであり，また白人男性の身体的特徴をののしる台湾人の女性の友達であった。これらの出来事から，ワカヤマは「美や崇高な男性性などのアイコンは，人種主義そのものと同じく，見ている人の目の中のみにある」ことを悟る[28]。こうしてワカヤマは故国に帰り，パウエル街へと行き着くのである。

3）『六華<Rikka>』とゴードン・ヒラバヤシ

1977年以前の日系カナダ人による出版物で，あまりこれまで紹介されていないのが，トロントで1974年に創刊された英文雑誌『六華<Rikka>』である。この雑誌は1980年代後半まで続くが，筆者が現在までに見つけているのは，1987年に出された第12巻第1号までである。『六華』の発行者はジョージ・ヤマダというアメリカ出身の二世である。ヤマダは長年人権問題に関わる活動をしており，1974年には「先住民を支援するカナダ協会<Canadian Association in Support of the Native Peoples>」のトロント支部長を務めていた。『六華』の創刊号は1974年の秋に発行されており，編集には日本出身の社会学者トヨマサ・フセ，アルバータ大学の社会学者ゴードン・ヒラバヤシ，日系二世でUBCの生物学者デイヴィッド・スズキ，およびジョージ・ヤマダが携わっている。創刊号の中でヤマダは『六華』というタイトルを四つの大陸と二つの大洋，あるいは五人種と「世界中の困っている人々」を象徴する，と説明しており，この雑誌で，先住民，黒人，移民，そして日系一世，二世，三世，四世をつなぐような話題を提供したいという抱負を述べている。このような編集方針を反映して，『六華』の内容はかなり政治色が強い傾向がある。話題は先住民問題から環境問題，戦争，人種主義など，国際的にさまざまな問題を取り上げて論じると同時に，日系カナダ人の詩や論説なども多々掲載してある。記

事を書いた人々の紹介が載せてあるため，著名ではない個々の筆者たちのプロフィールを知る上で便利な資料となる。記事を書いているのは日系人も多いが，非日系人も数多い。また，恐らくヤマダのコネクションを通じてであろうが，日系アメリカ人もしばしば登場しており，JACLの機関紙『パシフィック・シティズン<Pacific Citizen>』の記事が掲載されていることもある。

『六華』には，その後日系カナダ人の代表者として大きな活躍をする人々が多く登場している。ジョイ・コガワは数多くの詩を掲載しており，また一時はシズエ・タカシマなどとともに『六華』の編集にも携わっている。1977年の春号には当時執筆中であった小説の一部が掲載されている[29]。また，日本ではあまり知られていないが，反核運動で活躍していたトロント在住の新一世セツコ・サーロウ<Setsuko Thurlow>も1976年から編集に加わっている。『六華』にはロイ・ミキ，マリカ・オマツなど後にリドレスで活躍する三世たちも原稿を寄せている。また，日本とカナダをつないだ環境問題として貴重な資料を提供しているのが，1975年の第2巻第1号のアイリーン・スミス<Aileen Smith>による水俣病に関する記事である[30]。アイリーン・スミスはアメリカ人を父に，日本人を母に持つ，日本生まれの女性である。夫である写真家のユージン・スミスとともに水俣病の実態を米国に紹介した。ところが，カナダ，オンタリオ州のドライデンの下流のインディアン居留地で水銀中毒が起こっていることを友人から聞かされ，1974年に現地を訪れる。グラッシー・ナローズ<Grassy Narrows>とホワイト・ドッグ<White Dog>の両居留地では，すでに1970年から食料のための漁獲が禁止されており，住民は生活手段を奪われていた。しかし，カナダ政府は水銀汚染の原因であるドライデン・パルプ・アンド・ペーパー・カンパニー<Dryden Pulp and Paper Company>に対し，汚水の垂れ流しを止めさせるような実質的な処置は取らず，また患者が既に出ていたにも関わらず，住民の健康調査などもきちんと行っていなかった。そこでスミスは日本の水俣病の調査に携わっていた医師等に連絡し，1975年3月に日本人医師団が現地の調査を行なった。この展開により，それまで無為無策であったカナダ政府も動き出し，また事実を知った先住民たちも行動を起こし，事態は解決の方向へ向かった。筆者は以前この事件について調べたことがあるが，スミスによってこの『六華』の記事が書かれた後，グラッシー・ナローズとホワイト・ドッグの先住民の代表が水俣を訪れ，日本の患者との交流を行なっている。いずれにせよ，この事件はカナダでも知るものは少ないので，日系人の雑誌にこの記事が載っていたことは驚きであった。編集者のジョージ・ヤマダが先住民関係の仕事をしていたため，この事件のことも知っていたのであろう。『六華』は日本からの調査団を夕食に招く企画をしていたが，スケジュールの都合上キャンセルになったとある[31]。日系人自身がカナダの水銀問題に直接関与したかどうかは不明であるが，関係者との交流を持っていたことは確かである。

さて，『六華』の編集にヤマダとともに多くの力を注いだのがゴードン・ヒラバヤシであった。彼は『六華』に何度も強制移動と戦時措置法に関する啓発記事を書き，カナダおよびアメリカ政府の第二次大戦中の不正義を糾弾している。創刊号には，「カナダは人種主義者だろうか？<Is Canada Racist?>」という記事を書いており，その中で彼はカナダ史の中の人種主義の例として，先住民の迫害，BC州のアジア系の投票権剥奪，日系カナダ人の強制移動を挙げるほか，カナダにおける760名の経済的エリートの96%がイギリス系であるという，ジョン・ポーターが*The Vertical Mosaic*のなかで指摘した事実に言及している[32]。ヒラバヤシは1975年4月25日にトロントの日系文化センター<Japanese Canadian Cultural Centre>でスピーチをしており，その内容が『六華』の第2巻第1号に載っている[33]。この中で，彼は，苦難に耐えた一世，黙って頑張った二世の歴史を踏まえた上で，多様性を誇るカナダの中で自分のヘリテッジに胸を張って生きられる三世への期待を表明している。このスピーチの最後に彼は，自らヨーロッパ系との混血でありイギリス系カナダ人の妻を持つ自分の息子が，東洋哲学に興味を持ち，UBCで中国語，日本語，およびサンスクリットを学んでいる事実を例に挙げている。また，1977年夏号では，来るべきハミルトンでの戦時措置法に関

する会議に関する記事を書いているが，その中ではっきりとカナダにおける補償運動の必要性とその教育的効果について訴えている[34]。

ゴードン・ヒラバヤシは1977年の移民百年祭のなかで，アルバータ州の百年祭委員会の責任者として活躍しているが，その姿勢は常に政治的である。ハミルトン会議においても，またトロントで行なわれた青年会議<Japanese Canadian Youth Conference>においても，日系カナダ人がそれまでの二世にありがちな自分たちの生活安定のみを目標とする姿勢を脱皮し，広くカナダの，そして世界の人権問題に対して積極的に関わっていく必要性を訴えており，それを若い三世に特に期待している[35]。また，ヒラバヤシはアジア系カナダ人シンポジウム<Asian Canadian Symposium>の立役者でもある。このシンポジウムはヒラバヤシとリチャード・ヤング<Richard Young>博士が1976年に始め，その後オンタリオ州グエルフ大学の社会学者ヴィクター・ウジモト<Victor Ujimoto>がその中心となる[36]。現在わかっているところでは，1987年第8回までの記録がある[37]。シンポジウムの内容については，1977年以降の話になるのでここでは取り扱わないこととするが，このようなシンポジウムを1977年に始めた点，また日系カナダ人がリドレス運動を開始するはるか以前から補償運動の必要性を訴えた点など，ゴードン・ヒラバヤシがアジア系カナダ人運動そしてリドレス運動の重要な祖のうちの一人であることには疑問の余地はないであろう。

4）失われた歴史を取り戻すために

多文化主義の研究，あるいはポストコロニアル文学が注目される現在，カナダにおけるマイノリティの文学や歴史が盛んに出版されている。日系カナダ人の間にも全カナダ的に，あるいは国際的にも読まれる文学作品を書く人々が出ている[38]。そして，日系カナダ人自身による日系カナダ人の歴史も数多く著わされている。この傾向は特に1980年代から顕著になるが，日系カナダ人史に関する重要な著作が1970年代後半から1980年代の前半に生まれている。このことは，これらの著作の準備が1970年代あるいはそれ以前から始まっていたことを如実に表している。ここでは，1977年以前の出版物，および1977年以前よりその準備が行なわれていた4つの作品を取り上げる。

まず，強制収容の体験を世に知らしめる上で先駆的な作品が，シズエ・タカシマ<Shizuye Takashima>の*A Child in Prison Camp*である[39]。タカシマ自身による水彩画と自身の経験に基づいた文章で綴られたこの絵本は，早くも1971年に出版されている。作者はバンクーバー生まれの二世で，1942年の9月に強制立ち退きで家族とともにニューデンバー収容所へ移動する。四人の兄はオンタリオ州のキャンプに徴用され，そのうちの末の兄がカナダ軍に従軍し，インドへ行っている。戦争末期，日本への送還と東部への移住で家族の意見が分裂するが，最終的に兄が既に再定住していたトロントへ家族で移住する。作品の中では実際のタカシマ家の動向を若干簡略化してあるが，基本的に事実に即した物語となっている。

この作品は11歳の主人公シーちゃんの目から強制収容の体験が語られる形式を取っているが，時に父親や母親，姉を通じ，そして時にはシーちゃん自身の口から強制収容の不正義や人種主義への批判，憤りなどが明確に語られている。しかし，この本はそれと同時に家族愛やシーちゃんの夢想，美しい自然の描写などによって，恨みや憎しみを感じさせない悲しくも美しい物語となっている。作者はカナダの政策の残酷さを描く一方，収容された日系人を被害者として美化することなく，収容所というマイクロコスモスに生きる人々が抱えるさまざまな矛盾や対立，愚かさを，子供の鋭敏な目を通して浮かび上がらせているところに特徴がある。また，カトリックの神父やシスターたちの，収容された子供たちの文化的多様性に配慮しながら彼等に教育を施し，心を配る態度は，強制収容を決して加害者白人対被害者日系人という単純な構図に集約してしまわない，作者の真摯な態度を表しているといえよう。物語の中でシーちゃんの家族に降りかかってくるさまざまな苦難の歴史的背景が詳しくは述べられていないので，その点，日系カナダ人の強制収容の細かい歴史を知らない読者にとっては少し分かりにくい点があ

るかもしれないが，むしろそのことが，明確な説明もなく運命に翻弄される子供の感じる無力さのようなものを忠実に表現しているともいえよう。

さて，このようなシズエ・タカシマの作品であるが，実はこの作品が発表されたとき，カナダの主流のメディアのなかでかなり辛らつな非難を受けたといわれている[40]。この事実は，ロン・タナカが指摘しているように，マイノリティが自分の物語を語る権利を否定する白人主流層の態度を示しているといえよう。1971年は多文化主義がカナダで国家政策として開始された年であり，その意味でマイノリティの言い分がまだカナダ社会の中で正統性を認められていなかった時代の出来事であると片付けることもできるが，実はカナダ史の解釈をめぐる攻防は現在でも続いている。従来用いられてきた，権力の座にある者から見た歴史をカナダの正統的国史として再び復権させようとする強い主張がカナダの歴史学界のなかに存在し，その主張に対してメディアの中でも根強い支持がある[41]。その急先鋒である歴史学者ジャック・グラナスティン <J. L. Granatstein> は，日系人の強制収容に関しても，それが人種主義であったことを否定し，その政策としての正当性を，軍事的必要，日系コミュニティのなかの親日派の存在，BC州の排日世論などを盾に，今日でも強く主張している[42]。リドレスへの支持が世論の大多数を占めたことを考えると，彼のような意見は現在のカナダで少数派であると言えるだろうが，現在でもグラナスティンのような主張がメディアの中で支持されていることを考えると，多文化主義が社会に定着し，カナダ史のなかの多様な声が力を持つようになる以前の段階で，*A Child of Prison Camp* を出版したシズエ・タカシマの行動は，時代を先取りするとともに，勇気あるものであったと言わざるをえないであろう。

日系カナダ文学のなかで最も著名な作家と言えば，やはりジョイ・コガワ <Joy Kogawa> であろう。彼女の生い立ちや小説のあらすじは日本でもよく知られているので省略する。その代わりここでは，彼女の小説が日系カナダ人の歴史にもたらした「語り <narration>」の声の意義について考察してみたいと思う。

コガワは1959年から1964年の間，二人の子供を育てる傍ら，短い小説を執筆していたが，精神的に危機的状況に陥る[43]。そして1964年より幸福な結婚生活という理想と訣別し，自らの心の襞の中に深く分け入っていく作業を開始する。こうして彼女は詩を書き始め，1967年から1977年の間に3冊の詩集を出版する[44]。詩の中で彼女は強制収容に伴う痛みなどを表現しているが，3冊目の詩集 *Jericho Road* を出した後，彼女は強制収容の体験を本格的に語った半自伝的小説 *Obasan* を書き始めるのである[45]。小説を書き始めることになったきっかけをコガワは次のように語っている。

> *Jericho Road* が出た後，その書評が悪かったのです — 私って書評に敏感なのよ — それで，詩が下手だと思われているのだから詩はもう書けないって思いました。それなら，散文を書いてみましょうと考えました。…コールデール[コガワの家族がスローカン収容所の後に再定住したアルバータ州の町：筆者注]について記事を書いていたので，そこにいたときにこれからどうしようかと思って夢の中で尋ねました。その夜，オタワに行って公文書館で仕事をしなさいと夢の中で告げられたのです。それでオタワへ行こうと思いました。…そこで私はミュリエル・キタガワが弟に宛てた手紙を見せられ，これで何かをしなければならないと悟りました。その頃私は『オバサン』という題の短い物語を書いていました。小説には主人公が必要でした。実はしばらくの間，私は彼女を「ミュリエルおばさん」と呼んでいたのです，最初の原稿ができる段階までずっと。それから彼女はエミリーになりました。本当はミュリエルの仕事を編集したかったのですが，それはしませんでした。その代わりに彼女の書いたものを小説の材料にしたのです[46]。

こうして彼女は *Obasan* を書き上げるが，この小説の執筆や内容については1977年以降のことになるため本論文では触れない。しかし，彼女が *Obasan* を書く前後の自身の変化について言及しているので，それを考察してみよう。コガワは子供時代を回想し「自分は白人になりたかった」と述べている。事実，自分の名前を書くときに日系人であることが目立たないようにJoy N. N.と書いていたと言う[47]。子供が小さい頃もまだ自分は白人に近かった，と彼女はインタビューに答えている。子供に人種主義についても教えたことがなかった。彼女はその状態を「拒絶 <denial>」と呼んでいる。

人は「拒絶」状態にあるとき二つの平行した生活を送っているのです。一つの自分は周囲に人種主義があふれていることを知っていますし，自分がそれに遭っていることにも気づいているのですが，もう一つの自分はそのことを「拒絶」し，自分がその人であることをまったく認めないのです。ロバート・ルイス・スティーブンソンの「ジキル」と「ハイド」のように，この二つの間を何度も行ったり来たりするのです。それは長い間続き，やがてある時点で一つになります。私のなかの「拒絶」していた部分は，*Obasan*を書いているときや書く前でなく，書いた後に出てきたのです[48]。

コガワは自分の中の二つの部分を小説の中でObasanとAunt Emilyという二人の人物にしている。内向的で沈黙に包まれ，また沈黙の中にナオミを守ってくれたObasanと，活動家であり不正義を暴き，それに敢然と立ち向かって行く，そしてナオミを引っ張り，闘う勇気を与えてくれるAunt Emilyである。コガワはAunt Emilyについて，次のように語っている。

Obasanというキャラクターを主人公にしたのは，Aunt Emilyのような人を私は生まれてから一人も知らなかったからだと思います。私はフェミニストや活動家をまったく知りませんでした ― 若いときにはね ― でも，思うに，私の中にそういう部分が，疑問を問いかけそれに正面から取り組むことを必要とする部分があったのです。*Obasan*を書く中で私はそれらの部分と向かい合ったのです[49]。

小説*Obasan*を書き始める前，コガワは人種主義やその他の不正義と闘う部分を内面に秘めながら，人種主義の存在を否認し，また人種主義の犠牲となった日系人としての自分自身をも拒絶していた。コガワに言わせれば，二世の多くが，ひいては日系コミュニティ全体が「拒絶」の状態にあった[50]。しかしコガワは小説を書くことによって行動する自分像を表に出し，その後リドレス運動に深く関与するようになる。こうして彼女の小説は，やがて日系コミュニティのなかのAunt Emilyたちを引き出したのである。それと同時に*Obasan*は，カナダの歴史の語りに新しい声が誕生したことも意味した。人種主義の最大の力は，それによって抑圧されるものの声を奪うことであり，正統とされる知識を生み出す力を抑圧する側が独占することである[51]。それに対し抑圧された側の歴史を語ること，それも抑圧がどのように個人によって「感じられる」のかを語る声を持つことは，言語によって維持されている権力構造に挑戦することにもなる[52]。コガワがなぜ1977年にこのような転機を迎えたのかは分からないが，彼女は1975年から，前述した通り『六華』の編集にも加わっており，その後の彼女が政治性を発揮するようになる萌芽は既に現れていたと言えるであろう。いずれにせよ，「拒絶」「沈黙」から「活動」「正義の追求」へと変化を遂げた日系カナダ人コミュニティ全体のパラダイム転換を彼女の人生が象徴的に表しているように見える。

さて，コガワの小説は，日系カナダ人の第二次大戦中の体験を一般のカナダ人に広く知らしめた著作であるが，基本的に彼女一人で行なったプロジェクトであった。それに対し，日系コミュニティとして歴史書を残す計画も存在していた[53]。全国日系カナダ市民協会<National Japanese Canadian Citizens Association: NJCCA>は，早くも1948年のウィニペグにおける第二回全国大会において，日系カナダ人の歴史を書き残すプロジェクトの必要性を確認した。1957年にトロントのNJCCAで本の出版が計画され，翌1958年には全国から個人の記録を集める歴史コンテストが行なわれた。また，1950年代からコミュニティの歴史を調べ，ジャーナリストとなっていた二世ケン・アダチ<Ken Adachi>が，ブリティッシュ・コロンビアの日系人の歴史をNJCCAの委託によりまとめ，その内容が優れたものであったために，NJCCAはアダチに日系カナダ人のカナダへの移民から戦後の状況までの包括的な通史を書くための調査と執筆を依頼した。ちなみにNJCCAの歴史プロジェクトの責任者は，1940年代よりNJCCAのリーダーの一人として活躍していたトロントのジョージ・タナカであり，委員のなかにはロジャー・オバタ，ジョージ・イマイ，トヨ・タカタらの名前も見られる。1959年から始まったこの歴史プロジェクトは，最初18ヶ月から2年で仕上がる予定であったが，結局17年という長い年月をかけてようやく完成した。こうして強制収容の体験をも含め，戦前から戦中戦後にいたるまでの日系カナダ人の歴史を記した*The Enemy That Never Was*が日の

目を見たのは，日系カナダ移民百年祭も間近の1976年のことであった[54]。

アダチの*The Enemy That Never Was*は，現在では日系カナダ人の歴史書の中では古典となっている。強制移動政策について当時手に入る限りの記録を詳細に分析し，政策の苛酷さや不合理性を明確に指摘した最初の本として，カナダの第二次世界大戦中の日系人に対する政策を勉強する者にとっては教科書ともいえる書物である。しかし，*The Enemy That Never Was*には，歴史書としていくつかの問題がある。一つは，筆者アダチが日本語を読めなかったために，日本語の資料がまったく使われておらず，そのことによって日本からの移民に関する記述に不正確なところが多くなっている点である。もう一つは，この本のリサーチが行なわれているときには，まだ，強制収容に関するカナダ政府の公式資料が公開されておらず，アダチの記述は政府内部の資料を使わずに書かれた点にも限界がある。政府内部で何が起こったのかに関しては，後の研究を待たねばならないこととなるが，後に研究を行なったアン・スナハラやP. E. ロイなども強制収容政策に関するアダチの本の洞察の正確さや鋭さは大いに認めるところである。最後に，戦後の日系人社会の評価に関してアダチの本を批判する声もある。戦後の日系社会は収容後の再定住を果たし，その後カナダ社会への同化と社会的上昇を全体として達成していく。しかしその中で自分たちの歴史に鑑み，カナダ社会へ働きかけていく力にコミュニティが欠けていたことを問題視するような姿勢が1970年代後半には出てくるのである。そのような見方から見ると，アダチの本の結論はアンチ・クライマックスと映る。前述した『六華』のなかには*The Enemy That Never Was*への書評のなかで，1970年のケベック危機の際に政府は再び戦時措置法の濫用を行なったが，それに対する抗議の声が日系社会から一切なかったことに対する失望が述べられている[55]。これはアダチの本に対する批評と言うよりも，戦後の日系社会に対する批評と言ったほうが適切かもしれない。いずれにせよ，1976年というこの本の出版年は，日系コミュニティが「静かなモデルマイノリティ」から「リドレスを通じた人権運動の推進者」へと転換していく時期にあたっており，その意味で*The Enemy That Never Was*は時代の制約を受けていることを表す一方，ジョイ・コガワの本とともに，その後のリドレス運動に向かってむしろ時代の転換を促進した本として評価されるべきであろう。

以上のような限界のある日系カナダ人正史であるが，じつは歴史の偶然からこの本の欠点を補って余りあるもう一冊の日系カナダ人史がその一年前に出版されている。日本人社会学者の新保満著『石をもて追わるるごとく—日系カナダ人社会史』である[56]。新保がなぜこの本を執筆するに至ったかは，1996年に御茶の水書房から出された復刻版に詳しい[57]。かいつまんで言えば，1970年にUBCで博士号を取得した筆者は，UBC図書館の日系人関連資料収集に携わり，UBC図書館司書の権並恒治氏とともに一世関連を中心とした貴重な歴史資料の収集と保存を行なった。当時既に一世たちの平均年齢が70歳を越えており，彼等の体験を日本語のできる者が残さなければ，その歴史が永遠に失われてしまうという日系人社会の危惧がその背景にあった。こうして100年に及ぶ日系社会の歴史資料が集まった。新保は資料収集のみのつもりであったのが，前述のケン・アダチが日本語ができないため，一世は日本語が読め日本語で書ける新保に日系人史を書くことを期待したのである。こうして新保はアダチとの協議を経た上で，自らの専門である社会学の知識を生かしながらも一世たちを読者と想定した学術用語を使わない社会史を書いた。こうして，アダチの本と並ぶ日系カナダ人史の原典『石をもて追わるるごとく』が出来上がったのである。

この本の強みは何と言っても社会史であることであろう。日系社会のリーダーたちのみならず，一般の移民たちの姿が生き生きと描かれることによって，逆に学術的な歴史書よりもはるかに日系社会の実像が浮かび上がってくる。とりわけ想像を絶する苦難や貧困の中で生活を築き，子供を育て，夫を支え，山を切り開き，労働キャンプで炊事洗濯をしながら身を粉にして働いた一世女性たちの生き様がこれほど鮮明に描かれた移民史の著作は他にないといっても過言ではないであろう。また，人種主義と闘い，漁業や農業を守ろうとした日系一世たちの姿や，

困難な収容生活の中で明るさや楽しみを失わなかった日系社会の人間的な顔を，この本の中には見出すことができる。そして，ポン引きや博打打ち，ヤクザまがいの人びとなど，当時まだ野性味あふれるフロンティアであったBC州でたくましく生きた移民の姿を美化することなく描いている点が面白い。現在ビクトリアやバンクーバーに住んでいるイギリス系中流階級の人びとにとっては信じたくないことだろうが，一世たちが生活を築いていった頃は，日本人移民に限らず，BC州全体がいわゆる文明とはかけ離れたところだったというのが実態なのであろう。

上でも述べたが，『石をもて追わるるごとく』は日本語しか読めない一世を対象として，もともと書かれたものである。現在では，一世はほとんど残っておらず，二世以降はたとえ日本語が話せても読み書きができる人数は非常に限られている。その意味でこの本は現在では日本の読者，とりわけ日本のなかの日系カナダ人（あるいはアメリカ人）移民の研究者に読まれる。一つ残念なのは，このような著作を現在の日系人のほとんどが読むことができないことである。1970年代において本書が出版されたとき，一世中心の歴史が日本語で，二世中心の歴史が英語で出版されるという一種の分業は，やむをえなかったことであろう。しかしそれから20年以上経った現在でもその状態が存続し，コミュニティに関する情報が日本語話者と英語話者で異なっており，相互の交流が限られたものであることは残念なことだと言わざるをえないだろう。

一方1970年代の半ばになり，強制立ち退きに関する政府文書が30年ルールにより公開され始める。これらカナダ国立公文書館の資料を使って，立ち退き政策の決定過程を詳細に再調査したのが法律家のアン・ゴーマー・スナハラであった。その著書，*The Politics of Racism*のなかで彼女は，日系カナダ人の強制立ち退きが，その大義名分であった軍事的必要性ではなく，BC州の日系人排斥主義者たちによる政治的な方策であったことを暴露した[58]。この本はアメリカにおいて同様の研究をしたロジャー・ダニエルズの著書とともに，リドレス運動の中心的な根拠を提供した[59]。しかし，このことは1977年以降の話であるので，ここでは簡単な言及にとどめておきたいと思う。

5）パウエル街を中心とした社会サービス活動

さて，話を再びバンクーバーに戻そう。筆者が1977年前後のバンクーバーの日系コミュニティに関するフィールドワークを集中的に行なった関係上，資料がバンクーバーのものに現在のところ偏っている。今後他のコミュニティに関する調査が必要であることを指摘しながらも，日系カナダ人全体の「心のふるさと」とも言えるパウエル街の出来事は記録に残しておく価値があると考え，ここで簡単に触れておこう。なお，パウエル街の地区としての復興の過程は，拙稿「パウエル地区復興物語：1970年代の地域改善計画とバンクーバー日系カナダ人コミュニティ」に詳しいため，ここではその中で触れることのできなかったことを中心に書きたいと思う[60]。

まず，1970年代以前からアレグザンダー街の日本語学校や，ジャクソンとパウエルの角の仏教会は存在しており，日本語学校の建物では，強制移動後の再定住に力を発揮したバンクーバーJCCAが活動を行なっていたことに言及しておきたい。そして，1970年代の初頭の段階では，強制移動後にパウエル街に帰って来ていたシニアたちが貧しい暮らしを送っていた。その貧しい一世たちに社会サービスを提供するために，1975年にできたのが「隣組」である[61]。二世であるジュン・ハマダによって1975年に創立されたこの一世のためのドロップ・イン・センターはその後，パウエル街に住んでいた一世のシニアたちに社会サービスを提供するのみならず，バンクーバーの他の地域に住んでいたお年寄りが寄り集まって娯楽を楽しめる場所となり，また，三世のコミュニティ活動，文化・芸術活動の中心となった。「隣組」は，山城猛夫ら新一世らの協力を得て，英語のわからない一世と日本語のわからない三世たちの世代間のギャップを埋める働きもした。三世たちがコミュニティの歴史に目覚めていったことにも，「隣組」のような施設が日系

人の集まれる場所をパウエル街に提供したことが多大な影響を与えたと考えられる。というのは，70年代まで，他の日系人たちと関わらず暮らしてきたという三世が多かったからである。UBCのスペシャル・コレクションには初期の「隣組」のニューズレター『隣組月報』が保管してある。1978年から1980年までの月報で，この論文で扱う時期とややずれるのでここではその分析は行なわないが，初期の「隣組」の役員やその活動内容，資金源などを知ることができる貴重な資料である[62]。

「隣組」同様，やはり戦後のバンクーバーでの生活に困難をきたしていた老人のために言語サービスを中心とした社会サービスを提供したのが，新一世，坂田道子の開いた「ランゲージ・エイド」である。彼女は「ランゲージ・エイド」において，友人とともに日本語をはじめとして13の言葉で通訳，翻訳など生活に必要な言語的援助を提供するようになった。坂田は隣組とも密接な協力関係を築き，戦後の社会的上昇からとり残された家族のない一世老人たちの世話をするとともに，1970年代のパウエル街が象徴的エスニック・コミュニティとして復活していった過程の中で重要な役割を果たしたといえよう。

さて，新一世と三世の活動とパウエル街の復興の過程は上述の拙稿に詳しいため，ここでは簡単に触れるにとどめたが，そこで触れることのできなかったJCCAの二世を中心として行われたプロジェクトをここで少し見ておこう。それは，日系シニアのための住宅を確保し，また改善するためのプロジェクトである。戦争直後より日系コミュニティの代表的組織の役割を担ってきたJCCAは，「隣組」や「ランゲージ・エイド」など，バンクーバー以外の出身の日系人や日本人移民が日系老人のためにパウエル街で活動することを初めはあまり歓迎しなかったのであるが[63]，JCCA自体は連邦政府およびバンクーバーの市役所と協力をしながら，プロの日系ソーシャルワーカーを中心として，シニアのための住宅を確保するために，その必要性の研究を行い，また適当な場所を購入するための調査を行っていた[64]。このハウジングのプロジェクトは，その後，市の予算を受ける資格を得るためJCCAから独立し，ジャパニーズ・カナディアン・ソサエティ <Japanese Canadian Society of Greater Vancouver: JCS> という組織を作った[65]。このプロジェクトは初め，新しくバンクーバーの市内に大きな住宅建設のための土地を購入することと，パウエル地域に小さな住宅の建設を考えていたが，住宅の家賃を老人が支払えるほど安く抑えるためには，すでに建っている建物を購入してそれを改装する方が現実的であるという結論に至る。こうして選ばれたのがパウエル街にあったリッチモンド・ホテルであり，このプロジェクトは市の補助金を受け[66]，「隣組」の協力も得てJCSによって改装され，1977年に「サクラ荘」と名づけられた[67]。サクラ荘は，現在でもパウエル街の日系老人たちの住宅として機能している。ちなみに1998年には，バンクーバー郊外のバーナビーに新しい日系老人のための住宅「新サクラ荘」がオープンしている。

以上が，1977年以前のパウエル街で展開された，日系コミュニティのための社会サービス活動の一端の紹介である。これ以外に1970年代のパウエル街では，日系コミュニティの文化的活動が展開されていくが，これに関しては「日系移民百年祭」との関係が深いため，本論文では触れないこととする。あえて一言，1977年以前の日系三世たちの心情を象徴的に表すエピソードをゴードン・ヒラバヤシ氏が筆者とのインフォーマルな会話の中で話されたことがあるので，それを紹介したい[68]。それは，サクラのマークの中に楓のマークの入った「日系移民百年祭」のロゴが三世に人気があり，それをデザインしたTシャツを三世たちは喜んで着ていたそうだが，そのデザインの下に入っていたJapanese Canadianの部分をわざと隠れるようにして着ていたということである。ジャパニーズであるということが，百年祭の直前まで，多くの三世にとってネガティブなコノテーションを持っていたことを，このエピソードから推し量ることができる。百年祭を契機に日系人の文化活動は一斉に花開くのだが，百年祭以前のこのような一般の雰囲気を踏まえつつ，その後の活動の萌芽があちこちで見られる時代として，1970年代前半から中盤の日系コミュニティの様子を，本論文では捉えたいと思う。

結論

以上のように，移民百年祭以前の十年間に，日系カナダ人は文学，文化，歴史，政治，社会的にさまざまな活動を活発に展開していた。この論文においては，バンクーバーの資料が中心であったため，トロントにおける三世の活動やシニア・ハウジング・プロジェクトなどは取り上げることができなかった。日系カナダ人の戦後史の発掘はまだ片鱗が見えてきたばかりであり，今後，トロント，モントリオール，ウィニペグ，エドモントンなど大都市のほか，地方の小都市や農村地帯における日系人の活動にも研究が広がっていく必要があるであろう。資料的にも，JCCAなど日系人コミュニティの所蔵する資料のほかに，それぞれの州や市の公文書館などの資料発掘も必要となってくると思われる。日系人たちは戦争中も戦後も，生活状況を改善するために，さまざまな請願や交渉を政府に働きかけて行なっており，その資料が公文書館などに残されているからである[69]。

また，戦後の日系人の活動に関しては，特に三世の活躍に注目することが多いが，本論文で扱った資料は，二世の役割が非常に重要であったことを示している。二世は，一世と三世の間にはさまれて，主流社会に同化しようと努力するのみの存在のように日系移民史では描かれがちであるが，二世の活動に再び光を当てることによって，戦前，戦中，そして戦後からリドレス運動へと一貫した日系人の政治的活動の流れが見えてくるのではないだろうか。「沈黙するマイノリティ」像を脱却するために，あまりこれまで目立たなかった二世の研究を，今後充実させることが重要であろう。

謝辞

本研究は，筆者がカナダ政府奨学生として1997年から1998年にかけてビクトリア大学に留学した期間中に行なった調査に基づいている。カナダ政府に感謝するとともに，留学期間中にインタビューその他を通じてお世話になった日系カナダ人の方々に心からお礼を言いたい。

1）佐々木敏二『日本人カナダ移民史』（不二出版，1999）；新保満『石をもて追わるるごとく―日系カナダ人社会史―』（御茶の水書房，1996年）；Forest E. LaViolette, *The Canadian Japanese and World War II: A Sociological and Psychological Account* (Toronto: University of Toronto Press, 1948); Ken Adachi, *The Enemy That Never Was: A History of the Japanese Canadians* (Toronto: McClelland and Stewart, 1976); Ann Gomer Sunahara, *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians during the Second World War* (Toronto: Lorimer, 1981); 飯野正子，高村宏子，P. E.ロイ，J. L.グラナスティン『引き裂かれた忠誠心 ― 第二次世界大戦中のカナダ人と日本人 ―』（ミネルヴァ書房，1994）．

2）La Violette, *Canadian Japanese;* Keibo Oiwa, "The Structure of Dispersal: The Japanese-Canadian Community of Montreal 1942-1952," *Canadian Ethnic Studies* 18: 2 (1986): 20-37; 飯野正子「BC州からモントリオールへ ― カナダにおける日系人の再定住 ― 」*Journal of American and Canadian Studies* 8 (1991).

3）鶴見和子『ステブストン物語 ― 世界のなかの日本人 ― 』（中央公論社，1962）；蒲生正男編『海を渡った日本の村』（中央公論社，1962）．

4）ロイ・ミキ，カサンドラ・コバヤシ著（佐々木敏二監修，下村雄紀，和泉真澄訳）『正された歴史 ― 日系カナダ人への謝罪と補償 ― 』（つむぎ出版，1995）；マリカ・オマツ著（田中裕介，田中デアドリ訳）『ほろ苦い勝利 ― 戦後日系カナダ人リドレス運動史 ― 』（現代書館，1994）。

5）拙稿「日系カナダ人の戦時措置法撤廃運動および緊急事態法修正運動」『移民研究年報』3 (1997): 6.

6）飯野正子『日系カナダ人の歴史』（東京大学出版会，1997）；Tomoko Makabe, *The Canadian Sansei* (Toronto: University of Toronto Press, 1998).

7）Rick Shiomi, "Community Organizing: The Problems of Innovating and Sustaining Interest," in *Asian Canadians Regional Perspectives,* Selections from the Proceedings, Asian Canadian Symposium V, Mount Saint Vincent University, Halifax, Nova Scotia, May 23 to 26, 1981, eds. K. Victor Ujimoto and Gordon Hirabayashi, 339-354.

8）マユミ・タカサキ，筆者によるインタビュー，1998年1月19日，バンクーバーにて。

9）スティブストンは，バンクーバーの南のフレーザー川が太平洋に注ぐ河口の漁村で，戦前から日系人が数多く住んでいた。和歌山県出身者が多く，鮭漁や鮭の缶詰工場で人々は働いていた。戦後，強制移動から比較的早期に漁師たちが戻り，戦後再び日系人の集住型コミュニティができた数少ない場所の一つである。

10）Shiomi, "Community Organizing," 342-43.

11）Shiomi, "Community Organizing," 343.

12）マユミ・タカサキ，筆者によるインタビュー，1998年1月19日，バンクーバーにて。

13）Ron Tanaka, "Greg," *Journal of Ethnic Studies* 4:1 (1976): 53-74は短篇小説であり，Ronald Tanaka, *The Shino Suite : Opus 2* (Greenfield Center, N.Y. :

Greenfield Review Press, 1981）は彼の詩集である。

14）Ronald Tanaka, *Systems Models for Literary Macro-Theory* (Lisse: Peter De Ridder Press, 1976); Ron Tanaka, "Culture, Communication and the Asian Movement in Perspective," *Journal of Ethnic Studies* 4:1 (1976): 37-52; Ron Tanaka, "Towards A Systems Analysis of Ethnic Minority Literature," *Journal of Ethnic Studies* 6:1 (1978): 49-61.

15）Ron Tanaka, "The Sansei Artist and Community Culture," *Powell Street Review* 1:1 (1971): 4-6.

16）Nancy Kishita, "Japanese Canadian Youth: A Need for Togetherness?" *Powell Street Review* 1:1 (1971): 2.

17）Name Withheld (Courtesy, "GIDRA"), "White Male Qualities!" *Powell Street Review* 1:1 (1971): 7.

18）Alan [Hotta], "Analysis and Analysts," *Powell Street Review* 1:1 (1971): 7.

19）Powell Street Revue, "Japan From a Sansei Perspective," in *Inalienable Rice: A Chinese & Japanese Canadian Anthology,* eds. Powell Street Revue and The Chinese Canadian Writers Workshop (Vancouver: Intermedia Press Limited, 1979), 48-55.

20）Shiomi, "Community Organizing," 348.

21）Powell Street Revue, "Japan From a Sansei Perspective," 48.

22）"Face to Face with Rick Shiomi," *Asianadian,* 5:3 (1984): 10-13.

23）Powell Street Revue, "Japan From a Sansei Perspective," 54-55.

24）Powell Street Revue, "Japan From a Sansei Perspective," 53.

25）Powell Street Revue, "Japan From a Sansei Perspective," 50.

26）Tamio Wakayama, *Kikyo: Coming Home to Powell Street* (Madeira Park, BC: Harbour Publishing, 1992), 9. 筆者によるインタビュー，1998年1月17日，バンクーバーにて。

27）Tamio Wakayama, *Signs of Life* (The Coach House Press, 1969)は，ワカヤマの公民権運動中の写真集である。

28）Wakayama, *Kikyo,* 11.

29）Joy Kogawa, "Obasan / Short Story," *Rikka* 4:1 (1977): 36-38.

30）Aillen M. Smith, "Death from the Water," *Rikka* 2:1 (1975): 2-15.

31）George Yamada, "Editorial Notes," *Rikka* 2:1 (1975): 1.

32）Gordon Hirabayashi, "Is Canada Racist?" *Rikka* 1:1 (1974): 4-6.

33）Gordon Hirabayashi, "Japanese Heritage - Canadian Perspective," *Rikka* 2:1 (1975): 26-33.

34）Gordon Hirabayashi, "Two Current Issues: The War Measures Act," *Rikka* 4:2 (1977): 28.

35）Gordon Hirabayashi, "Address to the Conference," *Proceedings of the Japanese Canadian Centennial Youth Conference,* July 29-31 at the Japanese Canadian Cultural Centre, [1977], 46-53.

36）K. Victor Ujimoto, "Aged Japanese Canadians: Culture, Social Supports and Well-Being," in *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference,* eds. Cassandra Kobayashi and Roy Miki (Vancouver: JC Publications, 1989), 41.

37）現在筆者の手元に記録としてあるのは，第3回 K. Victor Ujimoto and Gordon Hirabayashi, eds., *Asian Canadians in a Multicultural Society,* Proceedings of the Asian Canadian Symposium III, University of Saskatchewan, Saskatoon, Saskatchewan, May 25-28, 1979; 第5回 K. Victor Ujimoto and Gordon Hirabayashi, eds., *Asian Canadians Regional Perspectives,* Selections from the Proceedings, Asian Canadian Symposium V, Mount Saint Vincent University, Halifax, Nova Scotia, May 23 to 26, 1981; 第7回 K.. Victor Ujimoto and Josephine Naidoo, eds., *Asian Canadians: Contemporary Issues,* Selections from the Proceedings, Asian Canadian Symposium VII, University of Manitoba, June 4 to 7, 1986; 第8回 K. Victor Ujimoto and Josephine C. Naidoo, eds., *Asian Canadians: Research on Current Issues,* Selections from the Proceedings, Asian Canadian Symposium VIII, McMaster University, June 1987 and Asian Canadian Forum IX, University of Windsor, June 1988である。

38）日系カナダ人作家でカナダ内外で最も有名なのがジョイ・コガワであろう。また詩人としてコガワより以前から活躍していたのはロイ・キヨオカ <Roy Kiyooka> である。現在では，詩人また英文学者としてロイ・ミキ <Roy Miki>，日本生まれの小説家ヒロミ・ゴトウ <Hiromi Goro> などが，カナダ文学のなかでその名を知られている。

39）Shizuye Takashima, *A Child in Prison Camp* (Montreal: Tundra Books, 1971).

40）筆者は残念ながらまだ具体的にタカシマの作品を非難した記事を見つけることができていないが，白人主流層からの批判は日系人がいくつかの場所で言及している。ここでは，その一つの例としてロン・タナカの文を挙げておく。Tanaka, "Sansei Artist," 6.

41）J. L. Granatstein, *Who Killed Canadian History?* (Toronto: Harper Collins Publishers, 1998).

42）Patricia E. Roy, J. L. Granatstein, Masako Iino and Hiroko Takamura, *Mutual Hostages: Canadians and Japanese During the Second World War* (Toronto: University of Toronto Press, 1990); J. L. Granatstein and Gregory A. Johnson, "The Evacuation of the Japanese Canadians, 1942: A Realist Critique of the Received Version," in *On Guard for Thee: War, Ethnicity, and the Canadian State, 1939-1945,* eds. Norman Hillmer, Bohdan Kordan and Lubomyr Luciuk (Canadian Committee for the History of the Second World War, 1988), 101-129.

43）Anna Kohn, "A Need to Reach Out...: Joy Kogawa," *Cross Canada Writers' Quarterly* 9:2 (1987): 6-7, 28.

44）Joy Kogawa, *The Splintered Moon* (Frederiction, NB: University of New Brunswick, 1967); Joy Kogawa, *A Choice of Dreams* (Toronto: McClelland& Stewart,

1974); Joy Kogawa, *Jericho Road* (Toronto: McClelland & Stewart, 1977).

45) Joy Kogawa, *Obasan* [初版](Toronto: Lester & Orpen Dennys, 1981).

46) Kathleen Donohue, "Free-Falling' and 'Serendipity': An Interview With Joy Kogawa," *Canadian Children's Literature* 84 (1996): 40.

47) 辻信一『日系カナダ人』（晶文社, 1990）, 54.

48) Donohue, "Free-Falling," 39.

49) Donohue, "Free-Falling," 36.

50) Donohue, "Free-Falling," 40.

51) Edward Said, *Orientalism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1978); Gayatri Chakravorty Spivak, "Can the Subaltern Speak?" in *Marxism and the Interpretation of Culture*, eds. C. Nelson and L. Grossberg (Basingstoke: Macmillan Education, 1988), 271-313.

52) Margaret E. Turner, "Power, Language and Gender: Writing 'History' in Beloved and Obasan," *Mosaic* 25:4 (1992): 81-97.

53) NJCCAの歴史プロジェクトの経緯はGeorge Tanaka, "Making of A JCCA History Book," *New Canadian* (December 30, 1975)を参照した。

54) Adachi, *Enemy*.

55) James M. Thurlow, review of *The Enemy That Never Was*, by Ken Adachi, Rikka 4:2 (1977): 29.

56) 新保満『石をもて追わるるごとく—日系カナダ人社会史』（大陸時報社, 1976年）。

57) 新保満『石をもて追わるるごとく—日系カナダ人社会史』（御茶の水書房, 1996年）。

58) Sunahara, *Politics of Racism*.

59) Roger Daniels, *The Decision to Relocate the Japanese Americans* (Philadelphia: Lippincott, 1975); Roger Daniels, *Concentration Camps, North America: Japanese in the United States and Canada during World War II* (Malabar, Florida: Robert E. Krieger Publishing Company, 1981).

60) 拙稿「パウエル地区復興物語—1970年代の地域改善計画とバンクーバー日系カナダ人コミュニティ—」『移民研究年報』6（近刊）。

61) Takeo Yamashiro, "Tonari Gumi: Powell Street Positively Revisited," in *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*, eds. Cassandra Kobayashi and Roy Miki (Vancouver: JC Publications, 1989), 55-58.

62) Japanese Community Volunteers Association <Tonari Gumi>, *Tonari Gumi News*.『隣組月報』(1978-1980). Special Collections, University of British Columbia.

63) Michiko Sakata, "Tonari Gumi," *Rikka* 4: 2 (1977): 7-8.

64) Greater Vancouver JCCA, "JCCA Senior Citizens Homes & Community Centre: Progress Report," *Bulletin* (February 1975).

65) Greater Vancouver JCCA「グレイター晩香坡日系市民ソサイエティーの結成迫る」 *Bulletin* (June 1975).

66) Japanese Canadian Society of Greater Vancouver <JCS>, "Correspondence from the Japanese Canadian Society of Greater Vancouver to the Vancouver City Council, Re: Japanese Canadian Senior Citizens Housing, Downtown East Side, Richmond Hotel, 374-378 Powell St., Vancouver," (January 26, 1977). Vancouver City Archives.

67) Greater Vancouver JCCA, "Japanese Canadian Society News," *Bulletin* (March 1977).

68) 筆者とゴードン・ヒラバヤシ氏のインフォーマルな会話，1998年11月19日，京都にて。

69) 拙稿「パウエル地区復興物語」はバンクーバー市公文書館の資料を中心にして，1975年から78年までのパウエル地域の「地域改善計画＜Neighbourhood Improvement Program＞」と日系コミュニティの再生を分析したものである。